

水について考える

岡山県 岡山大学教育学部附属中学校
二年 田 中 陽 乃

家族で夕食をとっていた時、私がこの水の作文の話をもちだすと、祖父は「朝顔に 釣瓶とられて もらひ水」

というある一句の話を始めた。私は、この釣瓶というものが何か分からなかったので祖父に尋ねた。すると、

「昔は井戸があつて、その井戸水をくみあげるのに使う小さい桶のこと。」

と答えた。井戸、釣瓶、と言われても、見たことのない私にはよく想像ができなかったがそのま話を聞いていた。

「朝顔のつるが伸びて釣瓶にからみついてしまい、とれなくなつた。釣瓶を離すにはつるを切ればいいのだが、それはかわいそうなので、隣の家へ水ももらいに行つたんだよ。」

私は作者の心の優しさにぐっときた。でも、なぜ隣の家へもらいに行くのか。当時、普通の家庭では水を手に入れる方法が井戸からくみあげる以外なかつたらしい。今は蛇口をひねればすぐに水がでてくれるが、当時は一杯水を飲むとすただけで労力と手間がかかつていた。しかし、井戸にはとても良い点もあつた。それは、井戸水は年中水温が一定に保たれていることだ。地下に掘っているためこのようなことになるらしい。これによって、夏の暑い時には水が冷たく感じ、冬の寒い時には温かく感じる。人々はこういった点でも重宝していた。と、このような話を楽しくそうに話してくれた祖父だが、昔の水を得るためなどの苦労があつたからこそ心に残っているのであり、またそれをこうして私達に語ってくれるのだと思う。

人間は水がないと死活問題だが、自然界でも水不足で危険な状態に陥っている事がある。

私は、通学路沿いにある川を見ながら毎日通学している。すると、例年より水かさが少ないことに気付いた。例年は水で隠れているはずのがけが見えるのだ。

なぜこんなに少ないのか、と考えると、今年の暖冬により雪が降らず、その雪溶け水がない事が思い当たつた。川の水が少ないと浄水場へ行く水も当然少なくなり、そうすると断水が起こりかねない。さらに、かんばつになると稲作や畑作も不作になり、物価が上昇して世の中が混乱するかもしれない。「暖冬」の原因はおそらく地球温暖化だが、地球温暖化は水に関しても大きな影響が及ぶことも理解しておかないといけないと思う。

こんな水がない状態とは裏腹に、水がたっぷりある情景が伝わってくる句がある。

「五月雨を 集めて早し 最上川」

という松尾芭蕉の句だ。山形県の最上川にたくさん降つた五月雨がゴゴゴと音をたてて流れていく様子が想像できる。今にも溢れでそうな大量の水が、自然と一体化して豊かに流れている。芭蕉はこの流れを見て、旅の疲れを癒やしていたという。こんな様子ばかりを見ていると、前に述べた大きな問題のかんばつ状態は想像できない。「かんばつ」と一口に言っても、これがどんなものか、どんなに大変なのか、はっきりとは分からない。なぜ分からないのか。それは、私達は無知だからだ。今はまだかんばつが恐れられているというだけで実際には水に不自由はしていない。しかし、何十年かするとますます地球温暖化が進み、本当に「水不足」「かんばつ」の時代が来るかもしれない。そんな時に、

「こんな事になるなんて知らなかつた。」

とあせつても、もう手遅れだ。だからこそ、今、近い将来の問題が既に見えている時に、もう一度水について考えてみるべきだと思う。今の生活の一つ一つが後々世界の環境までも変えてしまうという事を理解して、これからも水のありがたさを忘れずに生活していきたい。

「折水」ということ

岡山県 岡山大学教育学部附属中学校
二年 山下達也

「折水」という言葉がある。言葉を知っているだけではなく、実際にその生活に触れてみたことがある。

昨年八月二十四日、僕は愛媛県の瑞応寺というお寺にいた。お寺の生活をちよつとのぞいてみようと思ひ、旅行気分であったのだが、とても大切なものをもらってかえってきた。

お寺では、「全ての恵みを大切に」という信念が昔も今も変わりなく貫き通されている。お寺の風呂では、シャワーがないので、風呂桶の中のお湯を洗面器で必要だけすくって使う。僕は普段はジャージャーとシャワーを流して洗っているが、昔はこのお寺のようにシャワーがないのが当たり前で、皆、洗面器を使って風呂桶のお湯で体を洗っていたそうだ。確かにそうすると、その分だけ余計なお湯を流さなくてすむ。

そして、「折水」。これがつまり「節水」のことである。お寺では、食器を流し台に持って行ってジャブジャブ洗うようなことはしない。食べたらずぐその場で洗うのだ。しかも、その洗う方法がかなり変わっている。

食事では、絶対に漬け物が出されるが、まずそれを一枚か二枚残しておく。食事が終わったら、大きい茶碗にお茶を入れる。そして残しておいた漬け物で箸や茶碗をキュッキュッと拭いて洗う。洗い終わったら中のお茶は大きい順にほかのお椀へと移していく。こうして順々に洗っていく。最後に小さいお椀を洗い終わったら、その中のお茶を飲むのだ。

これにはかなり抵抗があった。そして予想通りまずかった。お坊さんに聞いてみると、

「最初はあまり好きではなかったけど、この道を志す者だし、節水のためなので、今は平気です。」
とのことだった。

確かにこの作業をすることで、かなりの水の節約になっている。洗うためのお茶はすべて飲んでしまうのだし、拭くのに使った漬け物も食べてしまうので、物を無駄にせずすむ。このように、物を無駄にすることは仏の恵みを無駄にするのと同じことだという精神がお寺にはあるのだ。お寺での生活はわずか二日で、食事も二回きりだったけれど、僕には最後まで抵抗があった。そうすることがよいとわかっていても、毎日実行する気にはなれない。それは、やはり水の大切さがまだ身にしみて分かっていないからなのだろうか。

地震の時などには、まず水不足で困るらしい。以前、阪神大震災に遭った人のエッセイを読んだことがあるが、その本によると、地震の時、まず一番にするべきことはトイレの水の確保だそうだ。地震が起きるとまず水が止められる。今はどこも水洗便所なので、水が配給されるまでが大変困る。自宅はもちろん、近所の小学校、公民館、たちまちあまりすぎて使用不可能になるそうだ。

それを讀んだとき、かなりショックを受けた。岡山には大きな地震は起こったことがない。が、先日大地震が起きた能登だって、地震が起きたことのなかった土地なのだ。そう考えると、他人事ではない。もし岡山に地震が起こったら、どこで用を足すのか。以前のようなくみ取り式のトイレならともかく、今は「水」に頼りきっており、それがなくては耐えられないような状況になっているということも、改めて痛感した。

もちろん水はトイレ用だけではない。料理、洗濯、風呂、掃除、その他色々なことに使う。生きるための水は、一日約二・五リットルだそうだ。そして人間は水が一滴もない状態では三日も生きられないという。

「恵みの水」という言葉があるが、そんな「恵み」を無駄にしない、してはいけない、という気持ちが大切なのだと思う。僕がお寺でもらってきた大切なものは、つまり、その「心」なのだ。

未来に僕がすべきこと

佐賀県 学校法人松尾学園弘学館中学校
三年 吉岡慎平

ある朝のことだ。僕は普段どおりに洗顔をしていた。すると、背後から妹の声が出た。「お兄ちゃん、水を出しすぎだよ。」と言うのだ。少し腹が立った僕は、何故僕に注意するのかを妹に尋ねた。妹の話によると、妹が通う小学校では『学校版ISO』というのを取得しようと、全校をあげて、省エネに努めていると言っているのだ。『水の節水・電気の節電・ゴミの減量化』の三つを主な目標に掲げ、毎日頑張って実践しているらしい。特に水に関しては、『水道を出す時は鉛筆一本くらいの太さにする』こと・昼の歯磨きの時、必ずコップを使用すること・水を出しっぱなしにしないことと具体的に提示されていて、毎日実践しているそうだった。そしてある一定期間後審査をうけて、合格すれば『学校版ISO』を取得できるようなっているそうである。毎日のひとり一人の小さな努力が水道使用量の減少という結果を出し、見事に目標を達成できたのだと、誇らし気に妹が語ってくれた。

ひとり一人の小さな努力は、学校の中だけに止まらず、妹のように家族も一緒に家庭の中でも実践されているようだ。ほんの少しだけ気をつけることが、大きな成果を实らせることは、誰もが知っているはずなのに、実行できないのはどうしてなのだろうか。妹と話しをしていて、僕は答えを得た気がした。実行できないのではなく、実行しようとしていないのだ。「知っていてやらないのは、知らない事よりもっと始末が悪いよ。」と母が言う時があるが、正にこのことなのだと思った。

「水」が大切で、有限な資源であり、水無しでの人類、いや地球そのものの存在は有り得ない。この事は、周知の事実であるはずだ。だが、日々の生活の中で、蛇口をひねれば水が出てくる便利さに慣れてしまい、水が自然界からの贈り物であることを忘れてしまっているのではないか。水と上手につきあってきた、先人達の知恵や工夫をしっかりと学ぶことで、今、僕達がやるべきことを見極める必要

があるのではないかと思う。

僕が住む佐賀県は、古くから稲作が盛んな平野で、田と田の間にはクリークと呼ばれる水路が張りめぐらされ、米作りの一年を身近で感じながら生活している。田植え前の水を張った田んぼの美しさ。春の澄んだ青い空を水面に映して、空を流れる雲も、水面を流れていく。行儀よく植えられた苗は、日増しにシヤンと成長していく姿を水に映しながら、僕達の目にも、力強い生命力を見せつけてくれる。蛙や虫などの生命をも育んでいるのだ。

他県の友人から「佐賀は田んぼばかりで、田舎だね。」と、少しバカにしたように言われた事がある。僕は「そうだろう。田んぼだらけの風景なんて、そう見られるものじゃないよ。よからうが。」と自慢気に言い返した。そんな僕に、彼は何も言えなかつたのを思い出し、なんだかおかしくなつた。先人達の英知で造られた水路や河川。今日まで、水と共に歩んできた歴史が随所に残る故郷を、僕はとても誇りに思っている。そして、この風景こそ、未来に残していきたいと思うのである。

現在、加速をつけ進んでいる地球温暖化に各界の著名人や各メディアが警鐘を鳴らしている。今後、人類に襲いかかるであろう様々な危機をシミュレーションし、十年後、五十年後…とみせつけ、最後に「今のままの生活を続けていくとどうなるのか、もっと考えるべきではないか」と問いかけるのだ。

確かに物事を大きな視点からとらえて、解決方法を探ることも大事だと思うが、妹達が行っているように、ひとり一人の小さな努力こそが、最も大切なのだ。今後の未来に大きく影響していくはずである。だから僕も一歩を踏み出そうと思う。今のこの生活が子々孫々と続くことを願って…。そして、『一人の百歩よりも百人の一步』が何より大切なことであると、みんなに伝えるために。

水がない生活を体験して

佐賀県 佐賀県立香楠中学校
一年 黒木 結生

私は、この作文を書く為に、一日かけてある実験をしました。それは、一日水無しで生活してみる、という実験です。水無しで生活することによって、水の大切さを知ろう、という狙いでした。

その日の朝、起きて顔を洗おうと思いましたが、水を使ってはいけなかったので洗えません。しばらくして、朝食の準備ができました。朝食は御飯と味噌汁で、とても美味しそうでしたが、どちらも水を使っているのです、食べることはできませんでした。飲み物も飲むことができないので、とても喉が渇きます。

朝食をとらなかったので、力が出ないまま、午後になりました。昼食はパンです。見た目は乾いているように見えますが、作る時水が使われているので、パンも駄目です。しかし、丸一日飲まず食わずは辛いので、昼食をとりました。喉がとても渴いでいたので、飲み物を飲んだ時には、水は絶対必要なんだなあ、と改めて思いました。

そして夕方になり、水を使っではいけないので、風呂には入らず、夕食を食べ、そのまま睡眠をとりました。

この一日を通して分かったことは三つあります。まず一つは、水が無いと、私たちの生活はとても不便になるということです。私が自分で試したように、水が無ければ、朝顔を洗う所から、夜風呂に入る所まで、掃除、洗濯、炊事等ができなくなり、生活がしにくくなるのです。

二つ目は、水は生き物にとって必要不可欠である、ということ。水が無くては、御飯も味噌汁もパンも、何も作ることはできません。それに、人間は元々およそ六十%から八十%が水分でできているので、水がなければ生きることさえできないのです。

そして、この二つのことから、またもう一つ分かることがあります。それは、

今、私達がしている生活は、水が無ければ成り立たないということです。それ程までに水は、私達と深く関りがあるんだなあ、と、自分で体験してみて、改めて気付くことができました。

私は、この実験を終えた後、水について調べてみました。すると、今の水はとても汚れているということを見ました。なぜ汚れたかというところ、その主な理由の中に、私達人間の環境汚染が原因に入っているということも発見しました。その環境汚染の中でも、私達が流す生活排水が大きい原因の一つになっている

そうです。

私達はこんなにも水にお世話になっているのに、私達がその大切な水を汚してしまっている現実。そこに、私はとても疑問を感じました。そして、疑問と同時に、怒りも覚えました。私達は水と共に生きて、水のおかげで生きているのに、と。私達自身の為にも、水について一から考えなければならぬ、と思いました。

水と共に生きる私達、水について自身で学び、考えることによって、水はどれだけ大切なのかを改めて感じました。他の沢山の人間にも、自身で学び、自身で考え、水の大切さを知ってほしいな、と思いました。

そして、今考えて終わるのではなく、これから水の為に何をすべきかを考え、実行に移し、水の大切さを伝えていくことが、本当に水を大切にしていけることなんだな、と思いました。

私は、この作文に書いたことをもう一度深く考えて、水を大切にしていこうと思えます。

熊本の地下水のこれから

熊本県 真和中学校

二年 明石 百合華

二十一世紀は「水の世紀」と言われています。水質汚染が深刻化している今、安全な水の確保は世界的な課題となりつつあるからです。では私達の住むこの熊本の現状はどうなっているのでしょうか。

「ハッとするおいしき熊本の水。すべてが地下水。」これは熊本市水道局が作成したパンフレットのコピーだそうです。このコピーの通り熊本は水源が百パーセント地下水ということでも有名です。しかも熊本市の地下水質は一部の地域に局所的な汚染がみられるものの、全体としては全国的にも良質な状態として保全されています。また、全国には水質汚染が深刻化している都市があり、それを考えると熊本は幸せすぎると言っても過言ではないくらいです。

このように熊本の水は良質で、地下水を原水としているため値段も安い。健康面や経済面などから見ても、私達にとってはうれしい限りです。しかしみなさんはこのような表面的なよいところばかりに気をとられていませんか。そして熊本の地下水が危ないという事実から目をそらしていませんか。

現在、熊本市の地下には豊富な地下水がたくわえられていると言われていいます。しかし人口の増加・産業の発展による地下水のくみあげ量の増加。また、雨水などが地下にしみこむための手助けをしてくれるはずの森や田畑などの減少。こうした増減のバランスのくずれによって年々地下水の量が減ってきているのです。このまま地下水を今までと同じように使い続けたら・・・最悪の場合、近い将来には地下水がなくなってしまうかもしれません。

このまま現状を悪化させてはいけません。そこで私が提案するのが「い・つ・か・ま・た」の心です。初めに「い」の意識向上。これは私達一人一人の熊本の

地下水問題への意識の向上です。関心を持つことが改善への第一歩となるからです。次に「つ」の努める。節水・環境保全など、自ら進んで取り組もうとする姿勢が大切です。次に「か」の変える。自分自身を、相手を、そしてこの世の中を変えたい。それくらいの意欲を持ちましょう。そして「ま」の守る。今まで築きあげてきた地下水を守る。私達の子どもの世代の分の地下水を守る。今までとこれからは守りましょう。最後に「た」の大切に。貴重なこの地下水を大切に使っていきましょう。

これが私からの提案です。熊本の地下水は今、減り続けています。ほんのささいなことでも続けていけば未来につながります。水があるのは当たり前じゃない。そういう意識を常に持って、事実から目をそらさないで、この熊本の地下水を守っていきましょう。

水質調査を通して

宮崎県 学校法人大淀学園鵬翔中学校
三年 山下直大

私達のクラスでは、昨年八月に、宮崎市高岡町の浦之名川を上流、瓜田川を中流、大淀川を下流とした三ヶ所で水質調査を行った。

私は、上流の調査のグループだった。C C D パックテストや水生生物の採集などの調査を行った。

調査結果をまとめた。すると、きれいな水を好む水生生物は上流の方が多くて、水の透明度は上流の方が高い、などの予想通りの結果が出た。だが、水のきれいさは下流の方が良いという不思議な結果が出た。

水質調査の結果を、文化発表会で発表した。好評で、四十人以上の先生方や生徒さん達が来てくださった。

今年の二月、N P O 法人主催の「大淀『川』のワークショップ」が開かれた。そこで私達の水質調査の結果を発表することになったので、石川君と私が代表で発表した。河川敷の清掃活動をしている人や、河川敷で飛行機のラジコンを飛ばしている人の団体や、カヌーで川下りをしている人の団体の発表などを聞いた。川にごみを捨てて汚すのはいけないことだと改めて思った。また、カヌーで川下りをする団体の発表を聞いて、カヌーの楽しさに少し関心が持てた。私達の発表では、水のきれいさがなぜあのような結果になったのかを、専門家の先生に伺うことにした。すると、一人の先生に、「支流の調査結果なので、その支流の流域に住んでいる人々の生活の様子が表れている」という意見をいただいた。私は、その意見を聞いて、「川をきれいにしている」と思われるような、きれいな川にしたいと思った。また、他の先生に、「流れ込む支流のきれいさによって、水のきれいさは上流、中流、下流に関係なく変わる」という意見をいただいた。私は、支流の川によっても他の川のきれいさが変わるということで、川を守ることとは、地域や県全体で取り組まなければならない問題だ、と感じた。そのためには、

一人一人が意識して、浄化装置を付けたり、合成洗剤の使用を控えたり、使用後の油や残った汁ものを流しに流したりしないようにする必要があると思った。そして、下水道が整備されていない地域では、役所ができるだけ早く下水道の整備を進めなければならないのではないか、と考えた。

川は、「汚れる」のではない。「汚される」のだ。だから、私達は、日頃、川を汚さないよう気をつけることが大切である。ほんの少し気をつけるだけで、きれいな川が保たれるのである。そうすれば、私達が川を汚すことはなくなり、川も汚されずにすむことであろう。また、台風などの自然災害などで川が汚されてしまった場合は、私達が積極的に川をきれいにすることが必要である、と考えた。

「きれいな大淀川を次の世代に受け継ぐこと」これは、私達の使命であると思う。このことから、大淀川に限らず、森林なども総括した自然も受け継ぐ必要があると思う。宮崎の発展の背景には、大淀川があつたことも大きく影響していると考ええる。もし、大淀川がなくなったら、宮崎平野もなく、促成栽培で育てられるおいしいピーマンなどを育てる農業や、地鶏などを育てる畜産も発展しなかったかもしれない。私達は、大淀川に感謝しながら水を使ったり、農畜産物を食べたりしなければならぬと気づいた。

今回の水質調査を通して、川や環境を大切にしようと思つた。また、川についての知識が増え、自分なりに農業や畜産のことについても考えることができた。とても良い経験だった。これからも大淀川を大切にしたい。

僕たちの水

鹿児島県 瀬戸内町立与路中学校

三年 東 純平

「蛇口をひねると透き通った光沢のある水があふれ出てくる。」これが当たり前だと思っていた。おいしくてきれいな水に、感謝の気持ちを持ったことさえなかった。しかし、この一年で水に対する僕の考えは大きく変わった。それは、今住んでいるこの島との出会いが大きな影響を与えている。

昨年の四月、僕たち一家は鹿児島市内から奄美大島の沖に浮かぶ周囲9平方キロメートルの与路島に引越してきた。人口百三十人ほどの小さな島は、青い海と、緑豊かな自然に恵まれ、森の中には小川のせせらぎも流れている。先人たちはそのせせらぎを「若返りの水」と呼び、農作業や手漕ぎ舟の漁で疲れた体をいやし、のどを潤していたそうである。水と緑の豊かな島、それが僕の受けたこの島の印象だった。

引越してまもなく、早めの梅雨に突入した。見たこともないような雨粒で周囲は一変した。山の木々は荒れ狂い、集落を流れる川も轟音を立て暴れ狂っていた。そんな天気の中をずぶぬれで帰ってくる父に暖かい風呂に入ってもらおうと蛇口をひねった僕は一瞬息をのんだ。水道から出てくる水は泥を多く含んだ赤茶けた水だけで、そこには透き通った光沢のある水は見るかげも無かった。これが同じ蛇口から出てきた水だろうか、僕は自分の目を疑った。

こんな経験は初めてだったのでとても驚いた。今まで当たり前であった水道水が当たり前ではなくなったのである。それからしばらく「赤茶色の水道水」が続いた。歯を磨くとき、シャワーを浴びているとき、お皿を洗っているとき、僕は今までどれほどの水が無駄にしてきたのだろう。「限りある資源なのだから、大切に使うなくては。」と、知識として頭の中ではわかっている、水道をひねりさえすれば水があふれてくるそれまでの生活の中では、水は、とても限りのあるものとは思えなかった。透き通った水道水が目の前から無くなり、当たり前であつ

たものが当たり前でなくなつて初めて、僕はこれまでの行動を後悔し、それを実行していない自分を大いに恥じた。

2、3日後、水はもとの「若返りの水」に戻った。僕はコップ一杯の水を一気に飲んだ。きれいな水がありがたかった。なんだかいつもよりもおいしい気がした。

後で聞いた話だが、与路島には簡易水道しか整備されていないため、大雨が降ると水源がにぎり、水道からは赤茶けた水しか出てこなくなるのだそうだ。大雨の時以外、蛇口をひねれば透き通った水が出てくる。透き通った水が出てくるように、毎日水源地を管理している人がいることも、この小さな島に来て初めて知った。いや、小さな島だからこそ、知ることができたのだ。この島に越してこず、鹿児島市内にいたままだったら、僕は水のありがたさを知ることが無かったかもしれない。当たり前のことを当たり前だと思えることがどんなに恵まれていることなのかということも、不便さを感じて初めて気付くことができたのだ。

このような考えを変える機会を与えてくれたこの島に、僕は今、とても感謝している。青い海、緑の木々。そして「若返りの水」の源であるこの与路島に心から感謝したい。きれいな水よ、ありがとう。そして、自然豊かな与路島ありがとう。

「ホタルの里」から発信！

鹿児島県 西之表市立国上中学校
三年 白尾 友 恵

あの日の天気予報は大雨洪水警報。父は一人で家に残り、私は母と買い物に出かけました。買い物から帰るときには道路は水没し、側溝からも大量の水があふれていました。

私の家の近くには大きな川があり、雨が降ると川の水があふれます。その日は予想以上の雨が降っている上、父を残してきたので心配でたまりませんでした。渋滞のため車が進まないことに、イライラしてしまいます。

帰ってみると、既に川の水はあふれていました。家に入れる状態ではありません。近くの道路脇に車を寄せ、車の中で夜まで待ちました。川の水が引くのを確認し、帰ってみると家は半分水の中。裏山は土砂崩れを起こしています。父は土砂が崩れる前に高いところに逃げて無事でした。元氣な父の姿を見たときには、体中の力が抜けたような気がしました。

その夜は祖母の家で一夜を過ごしました。翌朝、家に行くと、泥だらけで何から手をつけていいのかわかりません。初めての体験だったので、恐怖と驚きで胸がいっぱいでした。その中でも、人の命を左右する水の脅威には、体が震えるほどの思いをしました。

立ち往生していると、地域の人たちが手伝いに来てくれました。手分けして家の中の土をとりのぞき、黙々と復旧作業をしてくれます。この体験がきっかけで、初めて地域の輪について考えるようになりました。

私の住む地域には、桜島や沖永良部島からの移住者がたくさんいます。桜島の人々は大正三年の大爆発で住むところがなくなり、種子島に移住してきました。一説によると、桜島から移住してきたので、私たちの地域名が「桜園」になったとも言われています。種子島の人は移住者を気持ちよく受け入れたそうです。しかし、移住者は住むための土地や畑などを自力で切り開かなければならず、大変

な苦労があったそうです。自然に恵まれ、川もたくさんある地域ですが、川の近くの家は大雨の度に浸水の危険にあいます。その度に、こうして地域で力を合わせて踏ん張ってきたのだらうと思います。手伝ってくれる人々の後ろ姿に移住当時から少しづつ築いてきた地域の輪が見えたような気がしました。

このときの洪水では私の家と隣の家が浸水しました。水道の水が止まった上、井戸水にも土砂が混ざって飲めません。悲しいことに電化製品はほとんど壊れたいし、思い出の小さい頃の写真も水浸しになり、全部水を持って行かれました。何でこんなことになってしまったんだろうと考えるだけで心がモヤモヤしてきました。一番かわいそうだったのは、父と母でした。父は、後一步遅かったら水に流されて死んでいたかもしれません。母は、家のことや父のことを心配して、顔色が悪くなるほどでした。

あの洪水から六年。地球はいろんな環境問題に直面しています。海面上昇が進むと、種子島も桜園も真つ先に海に消えてしまうかもしれません。それを防ぐためにも、あの体験を忘れてはいけないのだと思います。

私が学んだことは、水の恐ろしさと大切さ、そして、思いやり助け合うすばらしさです。水は、これからも私たち人間を始めとする全ての生物に欠かせないものです。だから、大切な水を守るために、そして、人災で水の恐ろしさを体験することがないように、私にできることは何かを考えてみました。すぐにできることは、川にあるゴミを拾って、川をきれいにすることです。水が澄んでいるところにはホタルがやってくると言われますが、桜園は「ホタルの里」と呼ばれるほど、きれいな川のある里村なのです。これからも、水を汚さず、水と私たち人間が共存していける環境作りを心がけていきたいです。

五月。今年も桜園にはホタルがやってきました。

始まりは蛇口から

鹿児島県 始良町立帖佐中学校
三年 新田 瑞穂

「今使わないのなら水を止めたら。」

この言葉を何度心の中で反芻したことだろう。何度、水を出しっぱなしにしている人に言おうとしたことだろう。しかし口に出すことができない。手洗い場で友達同士おしゃべりをしている時によく見る光景である。

そんな時に思い出すのが、小二の頃の道徳の時間のことである。

「お風呂に入る時、みなさんは何杯の水を使いますか。」

話を讀んだ後、先生が質問した。それは、発展途上国に住むある少年の一日を書いた話だった。自分の仕事である水くみをしに、遠く離れた井戸に歩いていく。その時に、彼は全身をたった一杯の水で洗うのだ。その国では、水はとても大切なものだった。

おしゃべりをしている間にどのくらいの水が流れるのだろう。蛇口を全開にしてバケツにためてみると、一分間で二十リットルの水がたまった。これは二リットルのペットボトル十本分である。おしゃべりを始めると、水を出している時間は一分では収まらない。少年が体を洗うための何日分にも相当する量の水が無駄に流れていくのだ。

わたしは昨年の夏休みに、理科の自由研究で石けんと合成洗剤が与える環境への負荷を調べた。汚れの落ちやすさ、使う水の量、成分等を比較研究したものである。その結果、環境のことを考えると、合成洗剤よりも石けんを使用する方が良いことが分かった。しかし現実には、合成洗剤を使う人が多い。この大きな理由は、石けんの価格が高いことにありそうだ。

洗剤や工場の排水などに含まれるリンが大量に流れ込み、水が汚染されてしまった琵琶湖では、元のきれいな湖に戻すために、滋賀県はリンを含む合成洗剤の使用を住民に禁止している。また工場へは、リンの排出量を厳しく規制してい

る。このように住民と行政とが一体となった取組も必要になるのかもしれない。

わたしの名前は古事記の「豊葦原瑞穂の国」にちなんでいる。葦や穂は、きれいな水辺で生育する。いかに日本が水に恵まれている国であったかがうかがえる。また、日本の水に含まれるリンの濃度は〇・〇六パーセントであるという。

これは世界でもベスト五にランクされるものだ。これに対し、アフリカのスーダンのように濃度が一・七五パーセントと、日本の二十九倍以上にもなる国もある。データでも日本は水のきれいな国であることが裏付けられる。

家では母が率先して節水を心掛けている。お風呂の残り湯は洗濯や靴洗い、洗車に使用している。洗濯機にお風呂の水をためるのはわたしの役目である。また、歯磨きをする時は頻繁に蛇口を閉めている。手を洗う時も同じである。皿を洗う時は、小さく切った古布で汚れを拭き、使用した皿どうしを重ねないようにしている。皿の裏側まで汚さないようにするためだ。これだけでも、必要以上の水や洗剤を使わなくてすむ。以前、お風呂の水を止め忘れてあふれさせたことがある。その時はこっぴどく叱られた。祖母の家でも、洗濯物が少ない時はたらいに水をため、洗濯板を使つて手洗いしている。

新聞報道で、水不足によりひび割れた地面の写真を見たり、雨を降らせるためにロケット弾を打ち上げている様子を知った。日本では、まだこのような事態にはなっていないが、「湯水のように」水の無駄遣いをしたり、平気で水を汚したりしていると、いつかしつぺ返しをされるかもしれない。

わたしたち日本人にとってあまりにも身近で、普段意識しない存在である水。しかし水はあらゆる生命を支えている大切なものだ。「今使わないのなら水を止めたら」この言葉を今度こそ口に出したい。

先人から学ぶ水の大切さ

沖縄県 宮古島市立城辺中学校
二年 仲間 龍

僕の住んでいる宮古島は、昔から非常に水資源に乏しい島でした。この島に住んでいた先人達は、井戸の水や貯めた雨水によって、生活を支えていました。

山もない平べったい小さな島には、河川もなく、雨の降らない日が続くと、すぐに干ばつになり、生活用水に困るだけでなく、作物に与える水もなく、農作物が枯れていったそうです。

宮古島には、古くから伝わる「クイチャー」という唄や踊りがあります。この「クイチャー」は、昔の人々が雨が降るようにと、願ひ祈る「雨乞い」の唄でもあり、踊りでもありました。このクイチャーは、今でも多くの人に踊り継がれ、現在では「クイチャーフェスティバル」という、年に一回、島をあげてのイベントにもなっています。

この島の先人達は、「雨の恵みが欲しい」という思いを祈りに変えて唄い、踊ったといえます。それは、雨乞いをするほど水に困っていた宮古島の歴史を物語っています。「クイチャー」の歌と踊りを通して、今を生きる僕達に、水はあたり前にあるものではないという事を教えているのだと思います。

僕の住んでいる地域内には、地下ダムというものがあります。この地下ダムは、宮古島ならではのダムで、雨水等によって沁み込んだ地下水を海へ流れ出ないようにせき止め、貯溜させる事により、降水量に関係なく農業用水として、供給できます。この地下ダムができた事によって、宮古島が昔のように干ばつの被害で悩まされる事はなくなりました。

技術革新によって、「雨乞い」に頼るほかなかった昔と比べ、豊かに水が使えるようになった現代。しかし、蛇口を捻ればいくらでも出てくる水のありがたさをわからない人が多いのが現実です。便利になりすぎた生活によって、現代の人々の多くが水の大切さを忘れてしまっているのではないのでしょうか。水が何不自由

なく使える今だからこそ、「クイチャー」を踊った先人達の「水」に対する謙虚な精神をもう一度見直すべきだと思います。

僕自身、こんな事を考える前は、水を出しっ放しにして歯を磨いたり、水を必要以上に多く出し使っていたりと、頭では節水を意識しているつもりでも、つい面倒臭くなり、無駄づかいをしている毎日でした。

地球上の全ての生命体を育くむ水。地球上に住む全ての生き物にとって、なくてはならない水。自然の力によって地球を循環し、形を変え生き続ける水は、とても貴重な資源です。宮古島の先人達は、その貴重な自然からの恵みを求めてクイチャーを唄い踊りました。本当に水を必要とした人々の自然に対する敬虔な態度から生まれたものだと思います。

先人達の、水を必要とする願いや思いは、今、水を無駄に使っている僕達にとって、一番欠けているものだと思います。

今、僕を含む現代の多くの人々にとって必要な事は、クイチャーを踊った先人達の水に求めている切実な思いだと思います。

今、水道から送られてくる十分な生活用水や、地下ダム建設によって豊富になった農業用水など、この恵まれた環境の中で生活している僕達だからこそ、宮古島の伝統の踊り「クイチャー」に伝えられた水を大切にすることを学んでいくべきだと思います。

水赤字

シンガポール日本人学校

一年 岩 切 奈 々

私たちの暮らしに、水はかせない。しかし、日本は、水資源に恵まれた、たぐいまれなる国家であるため、世界の多くの国々が水不足に頭を悩ませているという事実についてピンとくることはない。だが、安全な水を飲む事が出来ない人は、世界人口の五分の一を占めている。

我々日本人は、水を永久資源だと思いがちであるが、この世にあるものは、すべて、限りがある。我々は、時として、その限界を考え、生活する必要があるのではないだろうか。

私が住んでいる国シンガポールは、水の輸入国である。シンガポールで水資源が確保できない理由として、山がないこと、また、自給するだけの貯水池がないことがあげられる。シンガポールにおける水使用量は、一日あたり約十三億リットルで、その半分がマレーシアからの輸入でまかなわれているということだ。だが、シンガポールが独立して以来、マレーシアとは、水の輸出入問題が政治的なかけひきとして使われている。これらの事は、対岸の火事かもしれない。ところが、そうも言えない問題なのだ。

日本は、ミネラルウォーターを除き、水そのものは輸入していないが、日本の食料自給率は約三十パーセントしかなく、世界の先進国では、百パーセント以上であるから、この数字がいかに低いものであるか認識できよう。

家畜、農作物を育てるには、莫大な量の水が必要である。ちなみに、水の用途をわけると生活用水は全体の十パーセント、工業用水は二十パーセント、農業、家畜、酪農で七十パーセントを占める。日本は、貴重な水を使って育てられたものを輸入して、我々の生活をまなかつているのだ。

水不足が最も影響を受けるのは、食料である。水不足と食料不足は連結しているのだ。世界が深刻な水不足におちいるということは、食料自給率の低い国は一

体どうなるのであろうか。現在、日本に輸出している国が、いくらお金を払うからと言って、自分の国の食料が不足した時に日本に食料を供給してくれるのだろうか。日本は、大変危険な状態だと言える。

先程申し上げたとおり、世界には不衛生な水しか得られないために、毎日六千人もの子供たちが亡くなっており、これを年間に換算すると約二百万人という大変な数の子供たちが死亡しているのである。二千二十五年には、五十億人が、二千五十年には、七十億人もの人々が水不足に苦しむとの予想もされている。

前世界銀行総裁の言葉に、「二十一世紀は、水紛争の時代になるだろう」というものがある。我々日本人も将来の水不足を念頭におき、今から将来に向けての水資源確保につとめなければならないだろう。

現在のところ、我々が心がけなくてはならないことに、節水をはじめ、食料の自給率をあげる工夫である。そして、食料輸入大国として何より大切なことは、周辺諸国との友好関係を維持していくことなどがあげられる。その他、シンガポールでも、まだ多くの国民に支持されているとは言えない計画であるが、水資源の確保として、「ニューウォータープラント」がある。これは、シンガポール国内の家庭排水を再利用したもので、世界貿易機関やアメリカの安全な飲料水の基準を上回る飲み水である。政府の課題として、排水利用であることに對する国民の心理面の受け入れと信用があげられている。

我々日本人が、生活排水の利用にせまられる日もそう遠くはないかもしれない。我々は、世界の水赤字事情に、もっと関心を持ち、将来に向けての水資源確保に、技術と知識を集結させ、対処していかなくてはならない。

第29回「全日本中学生水の作文コンクール」ポスター



8月1日～7日は「水の週間」
8月1日は「水の日」です。

第29回
全日本
中学生

「水の作文コンクール」
考えてみよう。当たり前にある水が、
実は当たり前じゃないかもしれないということ。

水について
考えよう!

水は、地球上のあらゆる生命の源です。
また、水は、自然の力によって循環する資源です。
水は、この循環の中で私たちの毎日の暮らしや、農業、
工業などの産業活動を支える重要な資源となっているほか、
地域の個性ある豊かな水辺環境や文化の形成にも大きな役割を果たしています。
この重要な資源である水を私たちの暮らしの中で不自由なく使えるように、
ダムをつくって水を貯めたり、水をきれいにし各家庭に配るなど様々な努力がなされています。
この機会に、水についての理解を深めるとともに、
この限りある貴重な水資源を未来に引き継ぐため、日常生活での体験や両親、
先生から学び聞いた話などをもとに、いま一度水を見つめ「水について」考えてみましょう。

Photo / 撮影1位「水と鳥のふれあいフォトコンテスト」 撮影グランプリ / (フォーメーション) 岡 和洋 撮影2位「水と鳥のふれあいフォトコンテスト」 撮影グランプリ / (フォーメーション) 岡 和洋 撮影3位「水と鳥のふれあいフォトコンテスト」 撮影グランプリ / (フォーメーション) 岡 和洋

募集案内

《テーマ》 水について考える（題名は自由）

《例題》 「大切な水」「水不足を体験して」「命を支える水」「ダムのかげで」
「水と暮らし」「水源を守る」「水のある風景」等

《原稿》 ① 400字詰原稿用紙4枚以内、日本語で記入された個人作品
② 本文の前（原稿用紙枠内）に題名、学校名（ふりがな）、学年、
氏名（ふりがな）を明記して下さい。

《応募締切日》 平成19年5月11日（金）【到着分有効】

《あて先》 各都道府県水資源担当部署

《中央審査会の賞》

- 最優秀賞……………賞状、盾、副賞……………1名
- 優秀賞……………賞状、盾、副賞……………4名
- 入選……………賞状、副賞……………約30名
- 中央審査参加賞……………メダル……………約100名

《入賞発表》 7月中旬に入賞作文を決定し、入賞者へ通知します。

《表彰》 最優秀賞及び優秀賞受賞者を「第29回水の週間記念式典」（東京）に
招待し、賞状等を授与します。

《主催》 国土交通省 各都道府県

《協賛》 文部科学省 全日本中学校長会 独立行政法人水資源機構
水の週間実行委員会

詳しくは、「水の日」「水の週間」についての国土交通省のホームページをご覧ください。 http://www.mlit.go.jp/tochimizushigen/mizsei/h_event_pr/event_pr01.html

—— 第 29 回「全日本中学生水の作文コンクール」概要 ——

第 31 回「水の週間」行事の一環として実施された作文コンクールの概要は、次のとおりです。

- 1 応募要領
- ① テーマ……「水について考える」（題名は自由）
 - ② 対象……全国の中学生及び外国に居住する日本人中学生
 - ③ 原稿枚数……400 字詰原稿用紙 4 枚以内
 - ④ あて先……中学校の所在都道府県水資源担当部局、ただし、外国に居住する者
にあつては国土交通省土地・水資源局水資源部
 - ⑤ 募集期間……平成 19 年 5 月 11 日（金）到着分有効、ただし、外国に居住する者
にあつては、平成 19 年 6 月 1 日（金）までに国土交通省土地・水資源
局水資源部あて到着分有効とします。
 - ⑥ 著作権等……○応募作文は自作の未発表のものに限る。
○応募作文の著作権は、主催者に帰属する。
○応募作文の返却は行わない。

2 応募状況

応 学 校	募 数 校	応 総 編	学 年 別		
			1 年 編	2 年 編	3 年 編
385		16, 173	5, 242	5, 697	5, 234

- 3 審査 応募作文 16, 173 編のうち、都道府県段階等の地方審査を経た 135 編を対象に、平成 19 年 7 月 5 日開催された中央審査会において、最優秀賞 1 編、優秀賞 5 編及び入選 25 編あわせて 31 編の入賞作文を決定

4 表彰

(1) 賞および賞品

賞		賞 品
最優秀賞	国土交通大臣賞	賞状、盾、副賞
優秀賞	全日本中学校長会会長賞	賞状、盾、副賞
優秀賞	水の週間実行委員会会長賞	
優秀賞	独立行政法人水資源機構理事長賞	
優秀賞	国土交通省水資源部長賞	
優秀賞	全日本中学生水の作文コンクール中央審査会特別賞	
入 選		賞状、副賞
中央審査参加賞		記念メダル

(2) 表彰式 最優秀賞及び優秀賞の受賞者を平成 19 年 7 月 27 日（金）、東京において表彰

5 中央審査委員 (50音順、敬称略)

赤川 正和 (社)日本水道協会専務理事)
須磨佳津江 (キャスター)
棚橋 通雄 (国土交通省土地・水資源局水資源部長)
長崎 宏子 (スポーツコンサルタント)
浜田 康敬 (独立行政法人水資源機構理事)
宗像 昭男 (全日本中学校長会教育研究部長)

6 主催者等 主催：国土交通省、都道府県

後援：文部科学省、全日本中学校長会、水の週間実行委員会、
独立行政法人水資源機構

第 29 回「全日本中学生水の作文コンクール」地方審査優秀者名簿

都道府県名	氏 名	氏 名	氏 名
北海道	石津 幸恵	河野 和歌菜	鈴木 翔
青森県	●小山内 香純	○熊野 翔一	坪谷 和
岩手県	饗庭 佑奈	○梅木 大幹	◎藤原 香織
宮城県	小川 舞美	阿部 愛	吉田 衣里
秋田県	五十棲 智世	川越 有沙	加賀 咲来
山形県	伊藤 大		
福島県	白川 成美	○鈴木 宗一郎	◎永山 貴啓
茨城県	塚田 友理	飛田野 篤	羽田 美帆
栃木県	柳原 悠	岡 順基	小林 剛大
群馬県	大澤 阿紋	○宇津木 尚子	渡辺 未紗
埼玉県	○山田 祐梨子	清原 ちは耶	穴久保 結香
千葉県	宮崎 麻衣	東 由紀子	稲田 愛美里
東京都	若林 知栄美	神作 友陽	山崎 稔里
神奈川県	○森川 愛美	甘粕 綾乃	木下 智絵
新潟県	中川 京香	囃口 奈美	安本 梓
富山県	藤島 早紀	○水上 瑛麻	山崎 瑞季
石川県	山崎 梓	渡邊 絢乃	松本 涼子
福井県	武長 藍	田中 誠人	斉藤 里奈
山梨県	馬場 夏朱	矢野 みのり	○副島 七海
長野県	橋本 咲絵	片桐 悠	上條 寛樹
岐阜県	川出 桃歌	古田 将基	清水 絢香
静岡県	○小林 太士	○太田 ひより	岸 花帆里
愛知県	◎荒木 健吾	牧野 圭佑	
三重県	橋爪 笙子	○奥田 千穂	宮木 美帆
滋賀県	濱田 明里	渡邊 仁子	村瀬 優
京都府	○木村 匡一	岩崎 茜	水本 真史
大阪府	林 佳奈子	○佐藤 優衣	角谷 安隆
兵庫県	岡崎 遥	楠本 千尋	山下 明莉
奈良県	◎宮久保 晴加	中西 彩	大前 友香
和歌山県	山野 翔子	西浦 莉彩	北田 春香
鳥取県			
島根県	朋澤 優利香	品川 史明	○毛利 侑紀
岡山県	岩村 いづみ	○田中 陽乃	○山下 達也
広島県	上本 里菜	栢野 真希	瀬畑 光治朗
山口県	蔵重 奈央	下松 麗絵	佐々木 由紀
徳島県	大塚 泰介	須藤 楓	大野 絹代
香川県	春原 亜美	川田 真里江	坂下 敬和
愛媛県	岡田 妙	三宅川 恭子	横田 莉央
高知県	戎井 芽衣	黒田 喜穂	
福岡県	百武 美也子	馬籠 優輔	浦志 優理子
佐賀県	○吉岡 慎平	山崎 結実	○黒木 結生
長崎県	大川 脩平	古賀 大貴	峰 翔太
熊本県	○明石 百合華	◎北口 明奈	藤川 美幸
大分県	椛田 智史	塩月 晴美	衛藤 実彩
宮崎県	○山下 直大	川野 美冴	岡田 祐汰
鹿児島県	○東 純平	○白尾 友恵	○新田 瑞穂
沖縄県	○仲間 龍	渡久地 杏奈	親泊 純
海外	○岩切 奈々		

(注) 氏名の前の印は、中央審査会における入賞者で、●は最優秀賞、◎は優秀賞、○は入選

第 29 回「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況

都道府県名	応募学校数	応募総数 (編)	学 年 別 (人)		
			1 年	2 年	3 年
北 海 道	8	92	4	49	39
青 森	12	245	123	93	29
岩 手	7	16	3	7	6
宮 城	6	68	55	3	10
秋 田	1	10	0	0	10
山 形	1	1	0	0	1
福 島	15	49	8	24	17
茨 城	29	676	317	263	96
栃 木	9	636	13	263	360
群 馬	8	755	171	270	314
埼 玉	6	209	21	157	31
千 葉	10	678	315	90	273
東 京	23	1,027	334	398	295
神 奈 川	16	612	191	224	197
新 潟	7	104	27	44	33
富 山	7	571	160	140	271
石 川	3	194	15	88	91
福 井	3	157	92	20	45
山 梨	1	124	0	124	0
長 野	4	66	1	55	10
岐 阜	1	14	0	14	0
静 岡	10	179	89	30	60
愛 知	11	530	128	77	325
三 重	5	188	30	112	46
滋 賀	6	701	182	291	228
京 都	5	330	79	189	62
大 阪	8	825	192	443	190
兵 庫	2	242	80	79	83
奈 良	11	391	61	133	197
和 歌 山	9	571	156	208	207
鳥 取	0	0	0	0	0
島 根	4	95	0	2	93
岡 山	6	70	2	54	14
広 島	3	15	1	12	2
山 口	6	35	6	10	19
徳 島	7	24	8	13	3
香 川	6	237	233	2	2
愛 媛	3	3	0	2	1
高 知	4	7	0	2	5
福 岡	9	345	11	196	138
佐 賀	8	223	57	96	70
長 崎	4	386	229	108	49
熊 本	38	3,806	1,557	1,155	1,094
大 分	4	139	4	10	125
宮 崎	11	250	157	51	42
鹿 児 島	16	247	117	81	49
沖 縄	11	18	1	15	2
海 外	1	12	12	0	0
合 計	385	16,173	5,242	5,697	5,234

(注) 海外は、シンガポール

「全日本中学生水の作文コンクール」応募状況の推移

	応募 学校数 (校)	応募 総数 (編)	性 別		学 年 別		
			男 (編) (%)	女 (編) (%)	1年 (編) (%)	2年 (編) (%)	3年 (編) (%)
第1回 (昭和54年度)	634	4,875	1,878 (39)	2,997 (61)	1,513 (31)	1,710 (35)	1,652 (34)
第2回 (昭和55年度)	486	3,930	1,446 (37)	2,484 (63)	1,245 (32)	1,462 (37)	1,223 (31)
第3回 (昭和56年度)	487	5,569	2,159 (39)	3,410 (61)	2,004 (36)	1,974 (35)	1,591 (29)
第4回 (昭和57年度)	512	5,111	1,878 (37)	3,233 (63)	1,923 (38)	1,848 (36)	1,340 (26)
第5回 (昭和58年度)	495	4,192	1,435 (34)	2,757 (66)	1,925 (46)	1,214 (29)	1,053 (25)
第6回 (昭和59年度)	531	7,013	2,905 (41)	4,108 (59)	2,923 (42)	2,115 (30)	1,975 (28)
第7回 (昭和60年度)	572	9,703	3,676 (38)	6,027 (62)	3,794 (39)	3,647 (38)	2,262 (23)
第8回 (昭和61年度)	507	7,431	3,080 (41)	4,351 (59)	2,809 (38)	2,680 (36)	1,942 (26)
第9回 (昭和62年度)	513	9,253	3,789 (41)	5,464 (59)	4,086 (44)	2,935 (32)	2,232 (24)
第10回 (昭和63年度)	498	10,119	4,233 (42)	5,886 (58)	4,212 (42)	3,501 (34)	2,406 (24)
第11回 (平成元年度)	641	13,192	5,601 (42)	7,591 (58)	5,345 (41)	4,392 (33)	3,455 (26)
第12回 (平成2年度)	551	11,782	5,320 (45)	6,462 (55)	5,404 (46)	3,549 (30)	2,829 (24)
第13回 (平成3年度)	623	12,056	4,834 (40)	7,222 (60)	5,174 (43)	3,821 (32)	3,061 (25)
第14回 (平成4年度)	552	12,718	5,332 (42)	7,386 (58)	4,898 (38)	4,533 (36)	3,287 (26)
第15回 (平成5年度)	473	13,680	5,340 (39)	8,340 (61)	4,658 (34)	5,024 (37)	3,998 (29)
第16回 (平成6年度)	557	13,647	5,591 (41)	8,056 (59)	5,247 (38)	4,577 (34)	3,823 (28)
第17回 (平成7年度)	558	15,918	6,617 (42)	9,301 (58)	5,940 (38)	5,388 (34)	4,590 (28)
第18回 (平成8年度)	491	15,479	6,595 (43)	8,884 (57)	5,403 (35)	5,606 (36)	4,470 (29)
第19回 (平成9年度)	456	13,688	5,731 (42)	7,957 (58)	5,088 (37)	4,792 (35)	3,808 (28)
第20回 (平成10年度)	493	13,764	5,935 (43)	7,829 (57)	4,842 (35)	4,609 (34)	4,313 (31)
第21回 (平成11年度)	429	11,903	4,971 (42)	6,932 (58)	4,324 (36)	4,059 (34)	3,520 (30)
第22回 (平成12年度)	413	14,283	6,288 (44)	7,995 (56)	4,737 (33)	4,968 (35)	4,578 (32)
第23回 (平成13年度)	362	11,841	5,131 (43)	6,710 (57)	3,862 (33)	3,844 (32)	4,135 (35)
第24回 (平成14年度)	413	13,442	6,159 (46)	7,283 (54)	4,878 (36)	4,691 (35)	3,873 (29)
第25回 (平成15年度)	453	13,385	5,980 (45)	7,405 (55)	4,100 (31)	4,618 (34)	4,667 (35)
第26回 (平成16年度)	452	16,488			5,595 (34)	5,655 (34)	5,238 (32)
第27回 (平成17年度)	439	15,726			4,489 (29)	6,464 (41)	4,773 (30)
第28回 (平成18年度)	373	16,038			5,157 (32)	5,811 (36)	5,070 (32)
第29回 (平成19年度)	385	16,173			5,242 (33)	5,697 (35)	5,234 (32)
合 計	14,356	332,456			120,849 (36)	115,213 (35)	96,394 (29)

(注)・第10回から海外在住中学生の作文募集を始める。
 ・第26回から作文応募時の性別表記を不要としている。
 (教育現場における男女共同参画社会づくりに向けた取り組みに配慮)

第29回「全日本中学生水の作文コンクール」表彰式

全国からの応募作文16,173編の中から選ばれた最優秀賞1編と優秀賞5編の受賞者の表彰式は、平成19年7月27日(金)に第31回「水の週間」記念式典(科学技術館)で実施された。



最優秀賞作文を発表する小山内香純さん



喜びの受賞者たち

(中央審査委員)



赤川正和
審査委員



須磨佳津江
審査委員



棚橋通雄
審査委員



長崎宏子
審査委員



浜田康敬
審査委員



宗像昭男
審査委員



国土交通省

国土交通省土地・水資源局水資源部

〒100-8918 東京都千代田区霞が関2-1-2

電話 (03) 5253-8111 (代表)

ホームページ <http://www.mlit.go.jp>